

## LMcorsa Race Report

## Super GT 2018 Rd.7 AUTOPOLIS GT 300Km



10月21日 | 天候:晴れ | 気温: 17度 | コース:オートポリス | 路面温度:36度(ドライ)



### Final Day Summary

13番手からスタートしたSYNTIUM LMcorsa RC F GT3はレース序盤こそハイペースで走行し順位を上げたが第1、第2スティントともにタイヤの摩耗が厳しく終盤でトップ10圏外となり、結果的に12位でフィニッシュする。

### Final Day

チャンピオンシップやポイントランキング争いが熾烈を極めている SUPER GT の終盤戦。残すところ2戦となった第7戦の「2018 AUTOBACS SUPER GT Roud7 AUTOPOLIS GT 300km RACE」の決勝レースが10月21日(日)に開催された。

レースウィークは標高900mにあるオートポリスらしく、朝方は10°Cを切る寒さで日中に日差しが出ると気温は上昇するが、秋らしい気候の中



で実施された。九州地方では唯一の大会ということで、21日は朝から多くの来場者がオートポリスを訪れていて、土日の2日間で3万930人の観客が総勢44台のSUPER GTマシンの白熱したバトルを見届けることになった。

21日のスケジュールは10時からのドライバー紹介でスタートし、11時から12時10分まではピットウォークが設けられていた。決勝レース前のウォームアップ走行は12時45分から20分間に亘って実施され、SYNTIUM LMcorsa RC F GT3は吉本大樹選手が5周、宮田莉朋選手が6周を走行して、決勝レース前の最終確認を行なった。

## Final Day

決勝レースは予定通りの14時にパレードラップによって幕を切る。第1スティントを担当した吉本選手は、スタートの13番手から1周目に3つポジションを上げて早くもポイント圏内の10番手に浮上する。2周目には7号車のポルシェをパスして3周目には先行車がピットインしたことで8番手となり、ラップタイムも1分47秒台から48秒台の安定したペースで走行。しかし、10周を過ぎると徐々にペースが落ち始め、16周目には1台にパスされて9番手となる。18周目に30号車のプリウスがコースオフしたためにセーフティカーが導入され、先行車につけられたギャップがなくなりSYNTIUM LMcorsa RC F GT3にとっては恵まれた展開となる。



レースは23周目にリスタートし吉本選手は9番手をキープしたまま、26周目にピットロードにマシンを向けた。4本のタイヤ交換と給油作業を行ない、宮田選手にドライバーチェンジ。19番手でピットアウトするやいなや、宮田選手は順調に走行を続けて30周目には17番手、35周目には



15番手、全車が規定のピットストップを終了した43周目にはポイント圏内の9番手に浮上していた。タイヤの摩耗が厳しいという報告を吉本選手から受けた宮田選手は、タイヤを縦方向に使ってなるべく劣るドライビングを行なう。だがレースも終盤となる45周を過ぎると、タイヤのグリップが顕著に落ち始めて、ラップタイムも1分50秒台へと降下してしまう。苦しい状況となったSYNTIUM LMcorsa RC F GT3だが、それでも後続のライバル勢を必死に抑えるが、50周目

に1台、53周目にも1台、55周目にもさらに1台にパスされて12番手までポジションを落としてしまう。残り10周は防戦一方となった宮田選手だったが、なんとか61周目にチェッカーを受けて12位で完走した。

昨日の予選Q1では、赤旗による中断という運も味方したがトップタイムを記録して予選Q2に進出したSYNTIUM LMcorsa RC F GT3。なので、決してライバル勢に対してパフォーマンスが劣っているわけではない。しかし、タイヤを含めたコンディションに左右される要素が合わなかったことや、理想的な戦略を取れなかったことが影響してポイント圏外に沈んでしまった。

SUPER GTの2018年シーズンは残すところ最終戦のみとなってしまったが、チーム全体で反省点を見直して良い形でシーズンを締めくくる。

## Team Comment

---



Director : 飯田 章

公式練習、予選と決勝レースともに上手くまとめることができませんでした。今シーズンはマシンの進化がみられるレースもあったのですが、今戦はやってきたことが結果に結びつけられない象徴的な展開となってしまいました。応援してくれている皆さまには申し訳なく思います。タイヤの異常摩耗があったことは確かですが、そこだけに責任転嫁はできないので、原因を探していきます。残り1つのレースしかありませんが、反省点を見直して応援してくれている方々の期待に応えたいです。



Driver : 吉本 大樹

序盤は上位陣でアクシデントがあったこともありポジションアップできました。しかし、早い段階で左リアタイヤが異常摩耗を起こしてペースが上げられませんでした。セーフティカーの導入は助かりましたが、ピットインのタイミングも誤っていたようです。後半のスティントも私と同様のタイヤを履いたために、攻めることができずに宮田選手には苦勞させてしまいました。今戦は、戦略も選択したタイヤも機能せずに苦しい状況でした。このような状況だと勝つことはおろか、ポイントを獲得することもできません。チームやサプライヤーも含めてもう一度、多角的に考え直すことが必要と感じています。



Driver : 宮田 莉朋

後半のスティントを担当したのですがニュータイヤで走り始めたのにも関わらず、グリップ感が序盤からありませんでした。吉本選手からの無線でタイヤの異常摩耗があったと聞いたので、労りながら走りました。それでも終盤はトラクションが掛からなくなり、ポジションをキープしたかったのですが難しかったです。マシンのセットアップも含めてですが、足りないところが顕著に出てしまいました。もっとマシンの特性を研究して、対策を取らないと次戦も厳しい戦いになりそうです。



● H.YOSHIMOTO

● R.MIYATA





## Final Day Summary

---

10番手からスタートしたK-tunes RC F GT3は、安定したペースでスタートドライバーの中山選手が40周まで引っ張りトップでピットインすると、メカニックの敏速な作業で新田選手を送り出し盤石の展開で今シーズン2勝目を達成。

## Final Day

---

チャンピオンシップやポイントランキング争いが熾烈を極めている SUPER GT の終盤戦。残すところ 2 戦となった 第 7 戦の「2018 AUTOBACS SUPER GT Roud7 AUTOPOLIS GT 300km RACE」の決勝レースが 10 月 21 日（日）に開催された。

レースウィークは標高 900mにあるオートポリスらしく、朝方は 10℃を切る寒さで日中に日差しが出ると気温は上昇するが、秋らしい気候の中で実施された。九州地方では唯一の大会ということで、21 日は朝から



多くの来場者がオートポリスを訪れていて、土日の 2 日間で 3 万 930 人の観客が総勢 44 台の SUPER GT マシンの白熱したバトルを見届けることになった。

21 日のスケジュールは 10 時からのドライバー紹介でスタートし、11 時から 12 時 10 分まではピットウォークが設けられていた。決勝レース前のウォームアップ走行は 12 時 45 分から 20 分間に亘って実施され、二人のドライバーが K-tunes RC F GT3 のステアリングを握り、合計 8 周を走行。計測結果は 8 番手だったが、決勝レースに向けて仕上がりの良さを見せていた。

決勝レースは予定通りの 14 時にパレードラップによって幕を切る。スタートドライバーを務めた中山雄一選手は、レース序盤から着実にポジションを上げていくことになった。10 番手からスタートした K-tunes RC F GT3 は、1 周目で早くも 8 番手となり、2 周目にはベストタイムとなる 1 分 47 秒 093 をマークして先行車とのギャップを詰めていく。上位のマシンがピットに入ったことに加えて、7 周目には競り合っていた 87 号車のランボルギーニをパスし 6 番手に浮上。

## Final Day

---

その後は、先行車を抜きあぐねてポジションをキープするが、トップ争いをする2台とは10秒以上の差をつけられてしまう。しかし、18周目に30号車のプリウスがコースオフしたためにセーフティカーが導入される。このセーフティカーランによってトップとの差がなくなり、23周目にレースがリスタート。上位陣はリスタート後の25周目を過ぎると徐々にピットに入りタイヤ交換と給油、ドライバー交代を行なう。そのため、27日目には2番手、32日目にはK-tunes RC F GT3はトップに立ちレースをリードすることになった。



K-tunes Racing LM corsaの戦略としては、前日の公式練習などでタイヤの摩耗が少ないと判断していたために、第1スティントを担当した中山選手をギリギリまで引っ張ることにしていた。中山選手は、チームの戦略を着実に実行するためにタイヤを労りながらも安定したラップタイムで走行を続け、トップに立つとチームからプッシュの指示が出る。すると、1分47秒台にラップタイムを上げて40周目にピットに戻る。ピットインのタイミングを引っ張ったために給油時間も短縮することができ、チームの敏速な作業も功を奏して、2番手で新田守男選手をコースに復帰させた。トップを走っていたのは、まだピットインを終えてないマシンで、K-tunes RC F GT3は実質的にレースをリードする。しかも後続に15秒ものマージンを築いて後半のスティントを走行することになった。

前半のスティントと同様にタイヤのピックアップに悩まされることになったが、それでも新田選手は1分47秒台から48秒台のラップタイムで走行を続け、2番手とのギャップを徐々に拡げていき、61周目に見事にトップでチェッカーを受けた。

今シーズンからLM corsaとタッグを組みSUPER GTに初参戦した「K-tunes Racing LM corsa」は、初年度ながらもシーズン2勝目を獲得。この勝利によって新田選手は、再びGT300クラスの最多勝に並ぶ記念すべき20勝を達成した。

第3戦の初優勝以降は波に乗れない戦いが続いたが、チームとメカニックは懸命な作業とピットインの訓練などを続けていて、チーム一丸で2回目の優勝を勝ち取った。

---

## Team Comment

---



Director : 影山 正彦

昨日の予選のときから決勝のラップタイムは安定して走れる自信がありました。展開次第では表彰台と思っていたのですが、優勝できて本当に嬉しいです。ドライバーを筆頭にチーム全員が力を集結して成し遂げた勝利だと感じています。応援していただいた関係者やファンなどすべての方々に感謝しています。レース展開は、中山選手が周回数の2/3まで引っ張ってくれて、ピットワークもミスなく新田選手にバトンを繋ぐことができました。第2スティントもミスなく安定したペースで走ってくれて、後続に17秒のリードで勝てたことも自信になります。シーズン2勝目を挙げたことで、最終戦に向けて士気も上がりました。次戦のツインリンクもてぎでは、シーズンの良い締めくくりをしたいです



Driver : 新田 守男

予選の展開からすると表彰台はありそうだと思っていましたが、勝てるとは思っていませんでした。チーム力で勝ち取った2勝目だと感じています。第2スティントを担当したのですが、素晴らしいピットワークでコースに送り出してくれたので、リードを保つことに全力を注ぎました。数周するとピックアップによってラップタイムが落ちたのですが、それでもライバル勢よりも速く走っていると言われたこともあり、安心して走れました。今シーズン2勝目を挙げる事ができたので、最終戦も期待したいです。



Driver : 中山 雄一

予選では路面コンディションとタイヤが合っていなかったため、本来のパフォーマンスを発揮できませんでした。それでも決勝レースでは選択したタイヤや戦略がすべて合致したことで優勝できました。最善の戦略を考えてくれたチームや、素晴らしいマシンを仕立ててくれ敏速なピット作業を行なってくれたメカニックに勝利で恩返しができることが嬉しいです。レースの序盤は先行車につまっていたのですが、セーフティカー明けからプッシュしてリードを築くことができました。そのリードを新田選手がしっかりと守ってくれたお陰で勝つことができました。



**ktunes**  
RACING

 **M.NITTA**

 **Y.NAKAYAMA**